
この現場への辿り着き方

1 工程@ 1 円～知的障害者の労働現場 006

千葉 晃央

■ランドセルがバツシャーン！

B君は走った！「待ってえ～！B君！あ～！！」「バツシャーン！！」B君はランドセルを川に投げてしまった。友人が私に近寄って来た「投げたん？ほんならオレ拾って来るわ！」私は「ありがとう」という。「B君と一緒にいてや！」「オッケー、気をつけてや！」「大丈夫！大丈夫！」…と友人とよくやり取りしたような記憶がある。川に拾いに降りるのは私ではなく友人が多かった。川に落ちたランドセルはふたが開いてしまっていた。なかの教科書は川の水で濡れている。濡れた本は、乾かしても、ページがくっついたり、波を打ってしまったりして、もうページは元には戻らない。これが初めてではなかった。これまでも、何度もランドセルが川の浅瀬に投げられた。いくらB君に「待って！」と叫んでも、行ってしまう。腕を一瞬つかんで止めることができても、ふりほどいていってしまう。

これが私の小学校2年生の下校時の経験だ。B君はこないだ引っ越してきた知的障害を持つ友達だ。当時、私はどれだけ理解していたかは分からない。しかし、帰宅す

る方面が同じで一緒に帰ってね！と、学校やB君のお母さんから頼まれていたような気がする。うちの母は確か、少し困っていた。その困っている意味も当時はわからなかった。住んでいたのは、校区のなかでは、多くの人が住んでいない方面。私の住んでいたマンションの向かい側は、もう隣の校区という端だった。なので、学校までの距離は、結構あった。

B君は新幹線が大好き。いつも新幹線の絵を描いていた。今はどうしているんだろう？毎日一緒に帰るのは、嫌ではなかった。B君のお母さんは時々「いつもありがとう」とお菓子やスイカをくれた。そして、B君は、いつもはとても穏やかだった。子ども同士なので、くっついて遊んだり、B君のまわりに友達の輪ができたりして、私もみんなと一緒にワイワイ過ごすことができた。ランドセルを川に落とすのも、今思うと、なんだか、私は困っていなかったような気がする。そういうことがあるのが、ま～B君かな～と思っていた。ランドセルを落とさないで、「なんで、この頃はしないのかな？」と思っていたような気もする。(すいません) B君は小学校高学年になると引っ

越してしまった。私がバイトで酒屋の配達をしていた時、引っ越した先のマンションを訪れて、表札だけは見た記憶がある。もう30年近くも会っていない。今はどうしているだろう？私は今こんな仕事をしているよ、と伝えたい。

■物事が進むリズムの違い

中学時代はバスケットボール部だった。2年からはキャプテンもした。そのバスケット部にも、2人の知的障害のある部員がいた。私の小学校出身の同学年だった。パスの練習をする。他の部員のように上手にはできない。順番が来るとスムーズに流れてきたパスの流れは止まってしまう。2か所の小学校出身者から一つの中学になった私が通った公立中学校では、私の小学校出身じゃない小学校の方は、障害を持った児童がほとんどいなかったようだ。私がいた小学校では、ひとクラスに1人。障害を持った友達がいるのはもう当たり前だった。なので、物事が途中で止まったり、ちょっとゆっくりになったり、少し一緒にしたりということが毎日だった。そういうことが起こることに慣れていて、というよりも、それが普段の物事が進行するリズム、スピード感だった。

部活では、「勝つ」というのが大きな目標だった。その目標と障害のある部員がいることが両立しにくい場面がキャプテンとしてはあったように思う。私の小学校出身の部員は、パスまわしが止まったりすることに慣れていて、もう一方の小学校出身の慣れていない部員はとても苛立っていた。時にはわざと取れないボール、きついパス

をしていたこともあったように思う。だんだん障害を持った部員の部活参加日数は減っていった。一方で、私たちのチームは時に勝利や、地区大会でそれなりのところまで行く成果もあげ、勝負というところでのそれなりの経験もできた。その影で、障害を持つ友達たちがほとんど参加しなくなっていったことは、よく覚えている。今卒業アルバムを開くと、その友達もバスケットボール部の集合写真と一緒に写っている。そんな部活の状況をうまく対処する方法は、あれから20年以上たった今でも、思いつかない。でも、ここでこうして書いて残すことは、意味があるのではないかと思う。

そして、今考えると、なぜ彼らは私と同じ部活を選んだのか？その2人とも小学校時代に同じクラスになっていて、私は本当によく知っていた。私がいたから？というのは考えすぎだろうか？そう思うと、自意識過剰かもしれない。でも、援助職側になると少し思う。まんざら、あり得なくもない話だと。

■めぐりあわせのなかで障害者領域へ

私は知的障害者の施設で働いているし、働いてきた。大学の福祉系学部に入學したが、その当時は高齢者領域を志望していた。大学時代は、キャンプリーダー、スイミングのコーチをしていたこともあり、就職先は児童福祉領域を志望していた。児童福祉施設の就職試験を受験するも落ちたり、自分から辞退したり。そして、いよいよ4年生3月末で就職浪人か？という頃に声をかけていただき、今の職場に何とか、辿りつかせていただいた。そこは知的障害者施設

がメインの社会福祉法人。よくよく考えると、自分にとってはとってもなじみのあるところだった。

今、こんなことを思い出した。スイミングのコーチをしていた時、いつも来る知的障害の子がいた。子といっても、子どものコースに通っているけれども、私よりも大きな体。水を飲むような癖もありながら、じゃぶじゃぶ、とても楽しそうに泳ぐ。泳ぎ方を教えるけど、目も合いにくいし、少ししか頷かない。でも、聴いているだろうと思って伝えたり、時には大きな体だけでも、腕を持って補助もしたりして、マンツーマンで泳ぎを教えた。その教えている様子を見て、そこの責任者であった方に、とても評価されたことがあった。それは、コーチをしている私には本当に励みになった出来事であった。

■対象者ではなく、日常のなかで

こう思い起こすと私の人生には知的障害を持つといわれる方との接点が多い。仕事もいつの間にか、たどりついた形だ。なので、小さいころからボランティアをしてとか、宗教的な活動のなかで、この仕事を志望するようになったのではない。小学校時代の帰り道にも、中学校時代の部活にも、スイミングコーチのアルバイト時代にも一緒にいたのだ。学校やバイトという日常のなかでだ。

そして、以前にも書いたが、就職をして一番長く一緒に働いているのは利用者といわれる知的障害を持つ女性だ。私の実感として、まさしく一緒に働いてきたといえる。時に助けてもらったり、励ましてもらった

り、お祝いをしてもらったり、働きながら多くの感情を共有してきた。その方以上に長く一緒に働いたと思える人が今後の私の人生に現れるだろうかと思う。もうすぐ私も40代。たぶん一生のなかで一番一緒に働いた方なのではないか。私のこんな過去を振り返ると、援助の対象者としてしか、障害を持った人を見ていないかのような障害者自立支援法は大の苦手である。

■巻末座談会へ

こんな過去だからこそ、できるものがあるればよいと日々思い、現場で格闘をしてきて、もう15年以上過ぎた。こんな過去があるからできることなんて、援助の場そのものにはないのではないかととも思う。でも、書くことは別だ。残すことができる。それは、自分には少しはできるかもしれない。そういった思いもあり、今回の巻末座談会を企画することになった。

日々、知的障害者が働く施設に出勤する。そして、目の前にいる方々と一緒に働きながら、時々思い出す。小学校の時、スイミングのアルバイトの時、一緒だった彼らは元気だろうか？そんな過去を持つ人も働いているのが、知的障害者の労働現場である。